

多摩大学の地域・広報対策としてのフットサル競技 総合マネジメント研究

Management of Futsal Team for public relations of TAMA Univ

共同研究メンバー

○杉田文章*、金美徳*、福角有紘**、福井佑典***、小仲貴文****（○代表、執筆者）

1. 目的

2011年度に創部されたフットサル部は、順調に成績を修め、2015年度(2016.3)には、イタリアへの遠征を実施、国際大会での優勝を勝ち取るとともに、東京リーグ2年連続優勝、関東リーグ準優勝、全日本大学フットサル大会においても、2015年度、2016年度と2大会連続で全国3位となった。こうした業績は、今後の多摩大学における外部・内部双方への重要な広報コンテンツであると同時に入試対策(入試広報としての認知の強化および、志願者の獲得の両面)にとっても有効である。

しかし、5人制競技というフットサルの特性や、本学の施設面等の限界などから、今後多摩大学の地域対策、広報対策としてよりふさわしい方策を策定するには、今一度若者や大学のフットサルやその周辺の状況についてよく調べ、適切な戦略を立案する必要がある。これは、女子チームの創設、本学の女子学生入学への貢献も期待されることから、重要と思われる。

以上のような課題意識に基づき、大学フットサル競技としては東京や関東地区よりもやや先んじて発展していると思われる関西地区のフットサルその他の状況を調べ、女子も含め、スポーツ選手の大学入学をめぐる状況や今後の流れを推定し、的確な対策を行うに必要な情報を得ることとした。

2. 調査概要

調査日程および調査地 2015(平成27)年 7月23日(都内)、8月5日～6日(神戸市、大阪市)
調査者 杉田文章、金美徳、福角有紘、小仲貴文、福井佑典

3. 調査結果の概要

3.1 フットボール全般の市場概況についての聞き取り調査(Jリーグ(日本プロサッカーリーグ)所属クラブの理事)

* 多摩大学経営情報学部

** 多摩大学体育会フットサル部監督

*** 多摩大学大学院経営情報学科 研究開発機構事務室

**** 多摩大学経営情報学部 入試課

Jリーグ所属セレッソ大阪理事のA氏にお話を伺った。主な内容は以下の通り。

(フットサルへのニーズについて)

・サッカーのニーズは、非常に大きい。トップチーム運営の株式会社と切り離れた一般社団法人セレッソ大阪スポーツクラブとして、当社も育成に力を入れている。最近では、女子チームも立ち上げた。女子は、高校の強豪校が知名度を上げてきている中、その進学先である大学では、日大、常磐大、静岡産業大など、女子チームを持つ強豪大学は（高校に比べて）多くなく、潜在的な市場がある。女子サッカーがインターハイ（高校総体）種目となったのは昨年（2014年）からであり、今後拡大が見込まれるので、大学女子サッカーの受け皿を整えるタイミングとして今は良い。これに対して、フットサルは、ニッチ市場といわざるを得ない。

(女子指導者、女性の指導者について)

女性指導者で、フットボールのS級（最上級）指導者資格を持っている人はわずかだが今後スキルアップしていくことが期待されている若い女性指導者は多く、今後大学がそういった指導者を迎える可能性とメリットは高いのではないかとのことである。

(まとめとして)

「大学女子サッカー」は、プレイ人口に対して思いのほか大学側の受け入れ枠は大きくなく、市場としてはあり得る、ということがうかがわれた。また、指導者についても、女子を指導する女性指導者、という存在が認識された。

3.2 高校女子のフットボール競技関連の現状（兵庫にて開催されている高校総体）視察

調査日時 平成27年8月5日（水）13:00～

調査場所および競技 全国高校総体インターハイ（女子） 於：ユニバー記念競技場
大商学園（大阪）vs 前橋育英（群馬）を観戦、視察した。

調査目的 女子サッカーのマーケット視察

(視察の総括)

高校総体の競技種目に女子サッカーが初めて採用されたのは2012年と歴史は浅い。

本学の入試戦略の計画案として、①女子入学者増加のため、女子サッカー部創部の可能性を探る ②5人制の男子フットサル部でブランディングを高め（質重視）、11人制の女子サッカー部で女子入学者を増やす（量重視）などが考えられる。このような課題意識を持って、インターハイ試合会場に赴いたところである。

規定によれば、ピッチに立つ選手を含めベンチ入りの選手が1チームで20名である。全国大会に進出する強豪校であるためベンチ入りできない選手たちも多い。出場している選手よりも一見して多いと思われる数の選手達が観客席にまとまって座り、試合中ずっと応援の声を上げている光景は、他の種目と同様であるが、ベンチ外の選手も含めて、女子サッカー選手は人柄も非常に明るいことが、印象的であった。単純に、こういった人材がキャンパスにすることで、学内の雰囲気も明るくなることが想起された。

3.3 大学におけるフットサル先進事例としての関西地区における大学フットサル部への聞き取り調査①

(神戸大学 主将木下さん（4年）、監督木村さん（3年）)

神戸大学フットサル部は、日本の中でも大学フットサル競技に最も早く取り組み、全日本大学選手権優勝などの実績を持つ先進校である。学生による自発的な成り立ちが特徴であり、大学におけるフットサル競技の文字通りのパイオニアである。

Jリーグクラブへの入団をメディカルチェックにより阻まれ、神戸大学に入学した人物が発

起人となり、神戸大学の学生を中心に2002年09月に結成され、2003年8月から兵庫フットサル連盟に加盟。'03年度に兵庫県TOPリーグに昇格、続いて'04年関西チャレンジを勝ち抜き、2005年度から関西リーグに戦いの場を移す。学内的には、2004年度から正式な運動部の認定を得ているようであり、10年余りの歴史ということになる。

加えて、神戸大学は、関西地区における大学その他の大会を創設し、育成するという面でも、リーダー的存在である。

親密、厳しさ、尊敬の三箇条を旨とするクラブで、競技団体としての精神性を重視している。部内から「監督」を選出し、監督は選手と一定以上の距離を保ち、トレーニング等のマネジメントから選手の選抜まで、権限と責任を持って運営する。このように緊張感を持ったクラブ運営を続けている。こうした背景と現状から、競技力を維持するとともに、参加した学生の社会的・人間的成長にも大きく寄与していることが伺われた。実際に、このチームの卒業者の就職実績からは、企業が彼らの社会人を非常に高く評価していることが伺われる。アクティブラーニングが叫ばれる今日、注目すべき自主性を兼ね備えたクラブであると言える。

多摩大学体育会フットサル部とは、生き立ちが180度異なるともいえるが、選手達の人間的成長を促す方策を考える上で、参照すべき重要な前例であると確信された。

3.4 兵庫県内の子ども向けフットサル教室「ディエゴフットサルスクール」視察

三田市立駒ヶ谷体育館にて、本学フットサル部監督福角氏が代表を務める幼児向けフットサルスクールを視察した。対象は幼稚園～小学校低学年。30名ほどの子供たちと指導者2名で指導。一方向的にスキルを教える教室ではなく、フットサルへの動機づけと、考えて試行錯誤するプログラムの提供による、アクティブラーニングを実践している。親も大勢来ていて、コートサイドで子供たちに声援を送っている。三田市は、子ども向けのプログラムを重視しており、福角氏の知名度も頼みとして参加者促進を目指しているが、サッカー人気の影響もあり子どもが成長してくるとサッカーに移るケースに悩まされている面もあるとのことであった。

多摩市にも、子どもたちを対象としたサッカースクールやクラブが多くあるが、フットサル(のみ)をコンテンツとしたスクール、クラブはないと思われる。現在日本では、「サッカーとフットサルを同時進行でたしなみ、適性に応じて、主種目を決めていく」という競技キャリアパターンを作ろうと試みており、今後の長期的な視点からは、今回視察したスクールを参考に、地域へ解放されたスクール、クラブの開設も、多摩大学の地域対応、地域貢献に資する可能性があることが示唆された。

3.5 大学におけるフットサル先進事例としての関西地区における大学フットサル部への聞き取り調査② (大阪成蹊大学)

マネジメント学部学部長の的地先生、フットサル部監督も務める柴沼先生にお話を伺った。

大阪成蹊大学は、大阪市東淀川区に位置する、マネジメント学部、芸術学部、教育学部を持つ総合大学である。定員や学科から見て、マネジメント学部が中心的な存在となっており、スポーツ競技における世界レベルの陸上選手を擁するなど、競技力向上にも力を入れている。

以下、フットサル、サッカーをはじめ、入試も含めた、スポーツ選手の入学の状況についてヒアリングした結果である。

- ・全国から学生が集まる。特に数校の私立強豪校とのパイプが強い。
- ・附属女子高と合同で女子フットサル部があり、一学年10～30名集まる。女子はエンジョイ層が多い(ボールを蹴ってみたい欲はある)。女子サッカー部(全国上位を目指すような競技部)

への新規参入は難しい。

・スポーツをやる学部ではなく、スポーツする選手をマネジメントする学部と打ち出すことで女子率が向上するようである。強化部学生の就職先としては、体育会系学生を好む金融(地銀、信用金庫)が多い。フットサル部においても、学費等の負担を免除する入試制度を持つ。女子サッカーについては、関西の大学で大きな費用を投じてスタジアムを建設して女子サッカー部を設立するも、女子学生の獲得に結び付かず苦戦している例もある、ということで、サッカーへの注力には慎重であるとのコメントもあった。

(まとめ)

大阪成蹊大学フットサル部は、神戸大学よりは、多摩大学体育会フットサル部の発生に近い。経営、マネジメント系の学部学科を持つのも多摩大と通ずるが、スポーツに特化した学科を持ち、スポーツ系教員と、その指導下にある複数の体育会運動部(強化部)があることは、多摩大学にはない強みである。スポーツ競技そのものでなくマネジメントの勉強のために女子が集まる、という部分も、教授陣や運動部の存在が大きいと思われる。学部、学科、コースの名称に「スポーツ」が入っているという点で、多摩大学とは異なるということである。(入試における競技スポーツへの依存度は相対的に高いとも言えるかもしれない。)

3.6 通信制高等学校における、フットサル競技部の現状視察

訪問日時 平成 27 年 8 月 6 日 (木) 9:00 ~

訪問場所 クラーク国際記念高等学校神戸三宮キャンパスのフットサルコースに在籍する選手達の練習場所となっている「エスペランサ神戸フットサルパーク」を訪れた。

・生徒はほぼ全員 F リーグを目指しており、週 1 回終日高校科目を勉強する日以外は、フットサル漬けの毎日である。F リーグのデウソン神戸と提携しており講師はデウソン神戸所属の選手が担当している。全国から生徒が集まり一学年 5 ~ 7 名くらい(全寮制)、うち 1 名大学進学希望がいる。

3.7 フットサル施設および F リーグ所属クラブの練習視察

フットサル施設見学(アスコフットサルパーク摩耶)および F リーグ デウソン神戸の練習を視察した。当施設は、兵庫県最大級のフットサル施設(正規サイズのコート 3 面)である。F リーガーは体格的に大きく優っている印象であった。クラーク国際記念高等学校の卒業生も 1 名在籍していた。

■まとめ

以下の点が確認され、認識された。これをもとに、フットサルを生かした大学の発展を模索したい。

- ・本学フットサル部の強み(監督の存在、大学のバックアップ)と弱み(選手の自発性)の再確認。
- ・女子率向上施策としての女子サッカー部や女子フットサル部に可能性があること。
- ・フットサルの知的部分(判断力、コミュニケーションなど)を活かしたアクティブラーニングとしての可能性
- ・高校サッカー部との太いパイプ作りの必要性